

# 『悪魔の陽の下に』 論：ベルナノスにおける悪魔(1)

## — ジェルメーヌとドニサン神父 —

鹿 毛 憲 一\*

### 00. 序

ジョルジュ・ベルナノスの『悪魔の陽の下に』は、1926年ブロン社「ロゾー・ドール」叢書の一つとして刊行された。ベルナノスのほとんど処女作であり、なんといっても出世作であり、代表作でもある。彼は、保険会社の営業マンとして、また妻子をかかえた一家の長として忙しい毎を送るなかで、この作品を書き続け、書き上げたのだった。ヴァレリー＝ラドの言によれば、1919年頃書き始められたこの作品は、ベルナノスが病氣治療のために各地を転々としている間も書き続けられ、出版のはぼ一年前の1925年2月に完成している。ヴァレリー＝ラドはこの作品に感動し、出版のために奔走し、同じカトリック系の文学者を動かし、「ロゾー・ドール」叢書の監修者だったジャック・マリタンは、この叢書の7冊目としてこの作品を刊行したのだ。この作品は、予想を覆して増版に増版を重ね、その結果ベルナノスは作家として一本立ちすることになった。<sup>1)</sup>

この小説は、序曲「ムーシェットの物語」、第一部「絶望の誘惑」、第二部「ランブルの聖者」から成っている。簡単に粗筋を追ってみると、次のようになるうか。

序曲「ムーシェットの物語」は、16才になる少女ジェルメーヌ・マロルティ（通称ムーシェット）の物語である。この少女の妊娠が分かったところから物語は動き始める。没落貴族で漁色家のカディニャン侯爵に父親を認めさせようとかけあうが、口論になり、部屋にあった猟銃で侯爵を殺してしまう。その後、もう一人の愛人である医者であり地方議員でもあるガレのところに現われ、情事を迫る。ただならぬ気配に尻込みするガレに侯爵殺しを告げる。すでに死体を検死し自

殺だと報告していたガレはその事実には驚くが秘密にする。そのなかでムーシェットは錯乱し、病院にかつぎ込まれ死産する。

舞台は変わり、第一部「絶望の誘惑」では、この町の教会の主任司祭のムヌ＝スグレ神父が、新しくこの教会に助任司祭として赴任したドニサン神父（この小説の主人公）への不満を、訪ねてきた昔の同僚であるドマンジュ神父にこぼしているところから始まる。ドニサン神父は、無知で粗野で小神学校・大神学校でも出来の悪い生徒だったのを、その信心を司教座評議委員でもあるドマンジュ神父に見込まれてこの教会の助祭職につくことができたのだった。ドニサン神父自身も、自分の中にある頑迷さを克服できない自分を自覚していた。会話をしても、言葉はわかりにくく、とちるし、自分が感じていることを表現するのが下手で、機知に富むことも期待するほうが無理の人間だった。しかし、朴訥とした語り口と単純な話を諦めることなく熱情をもって繰り返し語りかけることによって、教会から離れていた人達も少しずつ戻り始めていた。以前同様に、素直でかつ従順で謙遜な態度を示すドニサン神父は、しかし、任された告解聴聞の仕事を通じて始めて、「悪」の存在を知ることになる。

そしてある時、黙想会に行くように言われたドニサン神父は徒歩で向かう途中、道に迷い、「悪魔」に出会い、その誘惑に晒されることになる。一夜明けて教会へ戻る早朝、ジェルメーヌ・マロルティことムーシェットと出会い、そのはじめての出会いの中で、彼女の隠された秘密を暴き出してしまう。ムーシェットは帰宅直後自殺を計り、それを聞いたドニサン神父は、精神錯乱状態でかつ瀕死の状態の彼女を、父親と担当医師の反対にも拘わらず、近くの教会にかつぎ込むという醜聞を引き起こし、その結果、ドニサン神父自身も精神錯乱を理由に教会を去り、トラピストの修道院に入れられることになる。

第二部「ランブルの聖者」は、それから五年後が舞

\* 本学キリスト教科助教授（フランス文学）

台となっている。ドニサン神父は、ランブルの主任司祭に任命され、彼の評判を聞きつけ、自分の教区はもちろんのこと各地から大勢の人達が、彼の聖性に預かることを願い、あるいは助力を求めてこの教会前に並ぶようになっていた。そんなある日、リュザルヌ教区のひとりの信徒の幼子が突然亡くなり、思い余った両親はランブルまでやってきてドニサン神父の聖徳にすがろうとする。ドニサン神父は、死んだ子供を抱えたまま、聖堂へ駆けこみ、死の淵から呼び戻そうとするが失敗する。悪魔の試みを感じつつも、それをも打ち負かそうとする彼の試みは灰塵と帰してしまうのである。それでも毎日の聖務日課は彼を休ませることを許さないし、何よりも夥しい巡礼者の群れが、彼の告解聴聞の時間を待っていた。死の苦悶のうちにあっても、彼は狭い告解室の中で、立ったままこれらの人達の声に耳を傾け、答え、手をかざし、許し、赦免を与え続けた。そしてひとりの高名なアカデミー・フランセーズ会員が彼を訪ねてやってきた。告解の時間が終って、最後のバスが出て行っても神父は部屋に戻って来ない。彼は、部屋を出て、鄙びた聖堂に出かけ聖性に満ちた空気に感動し、希望に満ちてこの聖者の誉れの高い神父に会える喜びに胸を踊らせていた。人気のなくなった聖堂の告解室から漏れてくる光に導かれて中を覗くと、神父が羽目板にもたれ、狭い腰掛けで腰を支え、敷居にわたした薄い板に両脚を踏ん張ったまま死んでいるのを発見するのである。

以上がこの小説の話の筋といえるものである。もちろんこれでは三百ページを越える小説にはならないのであって、「大小説家の出現」といわれた理由にはならないのである。ジョルジュ・ベルナノスがこの小説に書き込んだのは、まず第一にジェルメーヌの侯爵殺害に至る経緯とそこに典型的に顕現しているドニサン神父赴任前夜のこの小教区の霊的状况、つまり日々の生活の中で日頃何らそのことに気づくこともなく〈悪魔の陽の下に〉晒されて生きている僕ら自身の日常の精神状況であり、次いで描かれるのはドニサン神父の霊的な闘いのすべてであり、神父（あるいは特別の恵をうけた者）の精神の内部で行われる「〈神〉と〈悪魔〉との永遠の相克」のそれが描き込まれているのである。この小論では、この作品の冒頭を飾る重要人物であるジェルメーヌと本作品の主人公であるドニサン神父との関わりを中心に据えて、特にこの関わりの意味するもの及びそこにベルナノスが織り込もうとした作品の意図について筋を追いつつ考察したい。<sup>2)</sup>

## 01. ジェルメーヌ

この小説の「序」にあたるこの章にはドニサン神父は登場しない。ドニサン神父の霊的な闘いは、それゆえここには登場しない。この章で描かれるのは、ドニサン神父が、神学校を出てはじめて助任司祭として赴任することになったアルトワ地方の小さな町カンパーニュの、いわば赴任前夜（実はすでに赴任してこの小教区の助祭職をしていることはカディニャン侯爵の台詞の中に出てくるのだが、出てくるのはその一箇所だけで本格的に登場することはない）のこの小教区の霊的状况を象徴的に示している。そこに濶歩するのは、ムーシェットと呼ばれる一人の少女、本当の名前をジェルメーヌ・マロルティという。この小説の主人公ドニサン神父の対極に位置にありながら、重要な人物である。ジェルメーヌ・マロルティは16才。ラヴォーの息子と約束をした仲であるにも拘わらず、この町の有力者であるド・カディニャン侯爵、あるいはまたもう一人の有力者であり、医師であり、この地方選出の議員でもあるガレとも肉体関係があり、いままさに父親がド・カディニャン侯爵と思われる子供を妊娠している結構な人気のビア・ホールを持つビール製造業者の一人娘である。

この小説のなかで、この娘ムーシェットの子供の本当の父親は明らかにされることはない。（ガレとの会話のなかでジェルメーヌは子供の父親の名前としてカディニャン侯爵の名前を出す、その呈示の仕方には曖昧さが残るような書き方になっている。）この小説のなかでも序にあたるこの「ムーシェットの物語」が作品として素晴らしい出来をしめしている大きな理由の一つは、このことがあると思われる。サスペンス仕立てになったこの部分の展開はまた、混沌として明確なものが失われてしまった現実の姿でもあるのだろう。この部分に登場するすべての人物、すべての状況が悪の様態をあらわしている。<sup>3)</sup>

その代表例をカディニャン侯爵殺害（結局自殺として処理される）に至るジェルメーヌ・マロルティの精神の内奥の変化のなかにみることができよう。

ジェルメーヌは、先にも述べたように、16才で許婚者がありながら、この小さな町の二人の有力者であるカディニャンとガレの愛人であり、互いに嫌悪し合う二人の間を渡り歩いている。カディニャンは元領主であるし、ガレは医師でありまたこの地方の代議士でもある。とはいえ、顧客の多いビア・ホールを持つビール製造業者という平穩なブルジョワの生活、煉瓦造り

のりっぱな家に住む16才の一人娘として育ち、父アントワヌが「女王さまみたいに育っている」といいふらすほどの完璧な娘であった。妊娠がわかった時、父母に詰問されながらも愛する人（侯爵）のことを明かすことなくただ泣きじゃくっていたジェルメーヌは、おそらくは三月のある日曜日彼との間に秘密を持って以来、秘密は秘密として後生大事にしてきたのだった。だから侯爵についての悪い噂（漁色家ですかん貧）も気にせず、あくまでも彼女の英雄だったのだ。

だが、父母の詰問のなかで、母から諭すように、侯爵の不動産は全てもうじき売り払われ、屋敷には「誰もいなくなるだろう」と聞かされて、泣きながら「死にたい」と訴える。たとえ見捨てられ、それまでの自分の生活を悔い改めても、孤独と倦怠のなかでその後の生活を送るなどとは考えられなかったのだ。さらに父アントワヌが侯爵との直談判の際に言ったと聞かされた「娘は全部話しましたぜ」という言葉のジェルメーヌに与えたショックは大きく、彼女は口をきけないほどに怒りで一杯になり、軽蔑を含んだ一瞥を父親に浴びせ、「ここから出て行け、失せてしまえ！」の言葉に、二階に駆け上がり自分の部屋に閉じこもった。

#### 01-1. 自己破壊

ジェルメーヌは遂に家を飛び出して、侯爵の館にやってきたのだった。だが、一時は結婚の約束まで口にした侯爵は、この醜聞を否定し、お金で握りつぶそうとしていた。その裏切りに対するジェルメーヌの態度は、嘘をつく事での謂わば自己防衛だったのだろう。彼女の内部に起こった変化についてベルナノスは地の文で次のように説明している。しかしそれははるかにそれを通り越して自己破壊にまで行き着くだろう。

「ながい間抑圧され、必要上からほとんど無意識に偽装されていたために、すでに残忍さを帯びている意志の唐突な飛躍、馬鹿者はこれに驚くがいい。それは弱者の表現を絶した復讐、強者の永遠の驚愕、たえず張られている罫なのだ！…もっとも単純な感情といえども、まだ人間の入り込んだことのない暗闇のなかで生まれ、育ち、電気を帯びた雲とおなじように、ひそかな親和力にしたがって、その中で混ざり、あるいは反発する。われわれは闇の表層に、近づくことのできない嵐から発した瞬時の微光をとらえうるにすぎない。」<sup>4)</sup>

家を飛び出すことで、この小さな町の閉鎖的な世界

から解放されて自由を得たと思った彼女の思いは、見事に裏切られたのだ。ひょっとしたら自分をこの閉鎖された世界から連れ出してくれるかもしれないという淡い幻想は、一瞬の内に破壊されてしまったのだ。そこで16才のジェルメーヌが考えついたのは、徹底的に自分を駄目にしてしまおうという悪徳であったのだ。このままでこれから自分に起こるであろうことを一瞬のうちに思いめぐらすと、嘘に嘘を重ねることで、侯爵の心を引き留めようとするのだ。掛け合いに行った父の言葉も否定し、恋人の名前として、侯爵のライバルであるガレの名をもちだして、侯爵を嫉妬させるのだ。

「あの人、あたしの情夫よ！」この新しい嘘をジェルメーヌは「まるで喉頭がひりひりする苦い飲み物を吐き出すように」吐き出すのだ。<sup>5)</sup>

お金で解決しようというブルジョワ的安逸に対する嫌悪は、一瞬のうちに、単なる無鉄砲さから神秘的なエネルギーのほとばしりとなってしまう。それまでの激昂した調子は、突然沈黙に変わり、甲高い笑いとともに「嘘言」が口をついてしまう。一つの嘘が、数限りない嘘を用意させ、大胆かつ迅速に歩を進めた。こうしてエネルギーが迸り出るように嘘をつき重ねた。ジェルメーヌは侯爵に、ガレとパリに行き、彼の囲われ者として生きる、それはずっと前から話している、と言ったのだ。それは「まるで愛撫のように（自分の）喉を締めつける新たな悦楽」となって、侯爵を狼狽させ激怒させた。当然のことながら起こったいさかいのあとで、彼女の破壊された自我は究極のところまで至るのである。「陰險な笑いに美しい唇をゆがめて」侯爵を見つめると「鋭い恐怖の叫び声をあげながら、軽いひと跳びで」ひじ掛け椅子を飛び越して、客間に入り、そして壁にかけてあった猟銃を取り出し侯爵の制止も聞かず、至近距離から発射し、即死させるのである。<sup>6)</sup>

この部分の描写には、次のような表現が使われる。「陰險な笑いに美しい唇をゆがめて」「鋭い恐怖の叫び声をあげながら、軽いひと跳びで」「気が狂ったように、それに一種怖れと怒りのまじった叫び声」あたかもジェルメーヌ本来の自分とは全く別のなにものかが彼女をそうさせてでもいるかのよう、彼女の精神の奥深いところで起こった変化は肉体的な動きのなかにも変化を引き起こしているかのようだ。

#### 01-2. 忌わしい恋人

小説上の次の場面ではジェルメーヌはもう一人の愛

人ガレの家にいる。カディニャン侯爵を殺害してから、少なくとも一日は経過している。作者ベルナノスの言によれば、彼女がガレの家に来た理由は、「犯罪の後、ガレとの情事はジェルメーヌにとって、もう一つの秘密、もう一つのひそかな挑戦」だったからだ。

「もちろん悪に対する逸楽もあろうが、それと同時に危険な遊びに興じる気持ちから、彼女は滑稽な操り人形を、青春の悪徳につきまとうかの妄想にも似た、自分によって孵化され、自分一人が知っている一匹の有毒な動物に変え、ついには自分自身の墮落の姿、その象徴としてそれをいつくしむようになったのである。」<sup>7)</sup>

このジェルメーヌとガレとの会話のなかで、ジェルメーヌは自分に対する憎悪、軽蔑について語る。滑り落ちて、底まで行って底につくまで、馬鹿な人間たちの軽蔑もそこまではやってこないというところまで行きついてやろうって考えがめまいみみたいにやってくるのだということを。自分のなかから、自分を呼ぶ幾百幾千の声が聞こえるのだ。それはジェルメーヌとは別の存在なのだ。

「どうやらあたしを呼んでいるのは一場所はわからないけど…とどろく響きのなかで呼んでいるのは…別のものの…。別のものがあたしのなかでぬくぬくと、威張り返っているんだわ…。人間なのかしら、獣なのかしら…。え、あたしを気遣って言うの？ええ、あたし気遣いよ！…あたしを掴まえている人間が獣、あたしをしっかりと掴まえてしまったもの、それがあたしの忌まわしい恋人なのよ！」<sup>8)</sup>

興奮して多弁になってきたジェルメーヌは神経発作の兆候を示していたが、そのなかで子供の父親が侯爵であること、その侯爵を殺害したことを告げる。ガレは医師として死体検分を済ませ、すでに自殺として処理していたのだ。だが、目の前のジェルメーヌがその時の詳しい状況を語るにつれて確信するが、「要するに、お前はなにも心配することはない。私はなにも見なかったし、聞かなかったんだ。」<sup>9)</sup> と言って、片づけようとする。するとジェルメーヌは新たな発作を起こすことになる。

「蒼白になるどころか、こめかみの薄い皮膚の下の血管が真っ青に浮き出るほど、額も、頬も、首筋までも紅潮させて。握り締めた小さな拳は、まだ彼を威嚇し続けていた。この哀れな娘のまなざしは、憐愍を求める最後の呼びかけのように、すでにもはや恐ろしい絶望しか現していなかったけれど。それからその定かならぬ光も消え、錯乱だけが彼女の眼

のなかにたゆたった。彼女は口をあけて、叫び声をあげた。あるときは鈍く、あるときは鋭い、ただ一つ尾を引く叫びとなって、その人間ならぬ嘆きの声は、すでに騒然としたざわめきとあたふたした足音が聞こえる小さな家のなかに響き渡った。」<sup>10)</sup>

ものすごい力の筋肉の硬直を三人がかりで抑え、エーテルにひたしたハンカチを顔に被せることでようやく彼女の発作はおさまった。その晩すぐ、他の病院に運ばれ、一人の子供を死産した後、一カ月後其の病院を退院した。以上が、この作品の序としてかけられた「ムーシェットの物語」における主人公ジェルメーヌという娘についての主な描写である。この部分に登場するジェルメーヌをとりまく人物たち、父、母、侯爵、ガレのなかであって、もちろん二人の愛人の間を渡り歩く彼女の存在は退廃的そのものであるが、世間を知りはじめて彼女なりに所有した世間知によって、彼女を取り巻く閉鎖的な隔離された土地からの脱出をはかる一人の娘の挫折と転落を描いたものともいえよう。それはそれまでうまく立ち回っていた（単なる大胆な振る舞いがあっただけでそこにあからさまな虚言はなかったと信じたい）が、ひとつの不信、ひとつの裏切りから究極の自己破壊へ進んでいく過程が描かれているといえる。彼女をしばしば襲う神経症的発作の描写は、自分を徹底的に駄目にしてしまおうという彼女の精神の内奥で起こった囁きに身を売り渡したところから始まったように思える。彼女はその存在が自分とは別の存在であることを知っていた。そしてそれに自分の魂を売り渡したのである。

## 02. 二人の長老

この小説の第一部「絶望の誘惑」の冒頭から登場するムヌ＝スグレ神父は、ドニサン神父が赴任することになったカンパーニュの教会の主任司祭である。長老の部類に属し、俗世間とうまく折り合いをつけながら残り少なくなった自分の人生を平穏うちに過ごして行きたいと考えている、ある面で普通の神父である。神学校での成績も悪く、評判ももう一つであったドニサン神父を、昔からの同僚であり、司教座評議員の長老のドマンジュ神父の薦めで助任司祭として迎えることになったのである。ムヌ＝スグレ神父は、クリスマスの日、久しぶりに会ったドマンジュ神父にドニサン神父のことで愚痴をこぼしているのだ。彼の証言を聞いてみよう。

「この一週間というもの、わたしが馬鹿みたいに

愛している骨董のあいだをあの黒服の大きな粗忽者にうろちょろされて、どんなに肝を冷やしたか神様だけがご存知だ！」「成績はよくない。正直に言うてよくない。」<sup>11)</sup>

さらにパプアン司教が彼ドニサン神父をカンパーニュの助任司祭として派遣するに際して、主任司祭のムヌ＝スグレ神父に書き送った手紙を披露して、なかなか自分の愚痴に同意してくれないドマンジュ神父に追い打ちをかけようとするのだ。

「私としては、自分の手元に残しておいた只一人の男をあなたに推薦する勇氣はありません。最近司祭になったばかりですが、私が彼を託したある司教区の主任司祭もどうしてよいかわからないといった状態です。もちろん長所は沢山あるのですが、妙に過激で頑固なところがあるために、せっかくの長所が損なわれてしまっています。嫉妬がなく、行儀作法をわきまえず、大変信仰深くはあるが、熱心すぎて賢明さを欠いています。ありのままに言えば、まだ十分に垢抜けしていないのです。私が恐れているのは、あなたのような方が、一日に何度も意識せずしてあなたを怒らせるに違いないこの田舎者と、果たしてうまくやっていけるかということです。」<sup>12)</sup>

実際に、彼を受け入れた当のムヌ＝スグレ神父の言はさらにひどいものだった。

「千倍もひどいんだ。この住み心地充分な家にある男がいること自体が、まぎれもなく良識に対する挑戦だよ。肩幅の広い、歯ざしりしたくなるようなうぶな善意がうかがわれる大男なんだ。それがまた、もじもじして真っ赤な手を引っ込め、鉈を打った踵をおずおず床にすりつけ、牛や馬を怒鳴りつけるのにうってつけの声を細めようとするんだからたまったもんじゃない。わたしのセーターは彼の匂いを嗅いでうんざり顔だし、婆さんにしたところで、二着あるスータンのどちらか見栄えのよいほうを選んだり、繕ったりするのにくたくたという始末だ。褒めてやりたいほどの敬虔さでミサを挙げるが、ぐずぐずと、無器用なくせに熱心なものだから、滅法寒いにもかかわらず、控えの席でびっしょり汗をかいてしまうんだ。とにかく、一日中、浮浪人のように泥だらけの道を走り回って、車曳きに手を貸してやったりしている。」「あの無骨者がここに入り込んでから、あの男は、自分では気づかぬだろうが、自分に一切を引きつけ、私をちっとも休ませてはくれない。彼がここにいるだけで、私は選択を迫られている。」<sup>13)</sup>

つまり、主任司祭として、派遣されてきた助任司祭がこれからもずっと教会での司牧の仕事を続けていくにふさわしいのか、それともドニサン神父の前任の教会の主任司祭が考えたのと同じく、ふさわしくないということで司教のところに呼び戻して貰うかの二つの選択だ。残り少ない神父としての生活を安穩にすごしたいと考えていたムヌ＝スグレ神父にとって、助祭として派遣されてきたドニサン神父は自分と全くタイプの異なる神父で体質的にあわず、彼の存在そのものがムヌ＝スグレ神父を苛立たせていた。もちろんこのように悪態ともきこえる愚痴をこぼすことができるのは、相手が昔からの同僚で気がしれている、さらにはドニサン神父を推薦したのは当のドマンジュ神父自身だからこそ言えることだったのだが。平和な生活を送っていたムヌ＝スグレ神父は、首席司祭として霊的指導の責任を考えれば考えるほど新たな試練を感じていたのだ。このクリスマスの日の短い、しかし互いの生涯にとって最後の訪問の別れ際に言う二人の年老いた神父の言葉は暗示的だ。あとの言葉は、ムヌ＝スグレ神父が別れの悲しみのうちに言う言葉だが、それとともに、いまいちど最後の人生をドニサン神父に賭けようとする決意の現れでもあるだろう。

「死は老人たちにたいしたことを教えてはくれない。だが、揺籃のなかの幼子は！しかも何と素晴らしい幼子だろう！もうすぐ世界は始まる。」「すべてはやり直されねばならん、どんなときも！終わりが訪れるまでは」<sup>14)</sup>

## 02-1. 召命

それまでのこの教会での生活ぶりを通して、この二人の神父はいつかはじっくりと話し合わねばならないと考えていたが、遂にその日がやってきたとムヌ＝スグレ神父が考えていたまさにその夜、ドニサン神父が部屋を訪ねてきた。そして経験も学識もなく真の品位もない自分には教区での司牧の仕事が身に余るので、どこか修道院に席を見つけないとの願いを申し出た。ムヌ＝スグレ神父は、司教の手紙にあった主任司祭と同様にドニサン神父の扱いには苦慮していたが、主任司祭としての義務感から霊的方向付けの助言を行うには、より厳密にドニサン神父の信念を確かめる必要があったのだ。ドニサン神父の信念は確固たるものだった。その信念を確かめる途中で、ドニサン神父は気を失ってうつぶせに倒れてしまったのだ。実はドニサン神父は常日頃から苦行衣を身に付けて生活していたのだ。うすうすそのことに気づいていたムヌ＝スグレ

神父も実際にスータンの下から出てきた光景には驚いてうたれたに違いない。

「腋の下から腰のあたりまで、上体は、ごわごわした馬の毛で粗く織った固い鞆のようなものにすっかり覆われていた。この恐ろしい胴着を前で吊っている細い革紐は食い込むように締めつけられていたので、ムヌ＝スグレ神父はそれを解くのに難渋した。すると、劇薬に触れたように苦行衣の耐え難い摩擦によって赤くむけた皮膚が現れた。表皮のあるところはくずれ、あるところは手のひらほどの水泡に盛り上がって、もはや血の混じった体液が吹き出している一つの傷口にはかななくなっていた。茶色に汚れた灰色の織物はその腋のためにぐしょぐしょだった。しかし、脇腹を細くえぐった他より深い傷口からは、真っ赤な血がしたたり落ちていた。」<sup>15)</sup>

ドニサン神父が気づいてからムヌ＝スグレ神父が語り始めたのは、自分自身の生活の反省であり、できるかぎり司牧の仕事にふさわしいように教育してやろうと思っていたムヌ＝スグレ神父が「いまや私を教育するのは君のほうだ」「いまこそわたしは君を必要としている」「君には聖霊が宿っている」<sup>16)</sup>と語る。ドニサン神父の存在は、平和のうちに死をまっとうしようとしていた安穏な生活の中に投げ込まれた新たな十字架でもあったろう。

## 02-2. 神の戦士

「真実がそれ自体の力で抗いがたい自明性をもって迫ってきて、わたしたちそれぞれが、一息に闇の表層まで、神の陽の輝きまで浮かび上がろうと、ただひたすら腕を差し伸べるといった生涯の時に望んでいる。そのとき、人間らしい慎重さなどというものは罨にすぎない。狂気にすぎない。聖性だ！…召しだしなんだ、呼びかけなんだ。神がきみをまっぴらっしゃるところに、君はのぼっていかねばならない。のぼりきるか、さもなくば破滅するかだ。人間的な救いなど一切期待してはならん。」「自分の危険と破滅とを賭けて、君を自分の道に引き戻すのだ。私は君を待っている人たち、君を餌食にするにちぎない魂たちに君をゆだねよう。」<sup>17)</sup>

それまでミサでの司式補佐、あるいは教会の補修作業といったことに精を出しながらも、自分の頑迷さを克服できずに、司牧の仕事は向いていないと頑なに考えていたドニサン神父にこの長上の命令は、神の戦士たるドニサン神父の従順の徳とともに困惑と絶望をも

たらしたが、それは完全な従順な神の戦士となることで消え去ってしまった。その後彼を捉えた「不思議な平安」は、自分の前に自由な天地を見出し、それまでのとらわれていた束縛から彼の知性をも解き放ち、むさぼるように書物を読み、寝る時間を惜しんで（一晚の睡眠時間約2時間）、聖書についての深い知識の宝に行き着いていた。そのうえで、毎日の教会の仕事での変化をみせることはなく、疲れもみせず信徒たちの家を朝早くから訪問して回った。はじめはうさん臭く眺めていた村人たちも、少しずつ教会に戻り始めた。

「あの人が神様の名を、ほとんど小声で、しかもあのような口調で口にすると、まるで雷に打たれたように胸がどきっとしましたよ」<sup>18)</sup>

ドニサン神父の従順の徳は、いぶかしげにそれらの様子を見ていたムヌ＝スグレ神父によって、ミサでの説教の仕事にも差し向けられた。口ごもり、言いよどみ、次第に熱を帯び、最後まで必死に戦い、遂には、ほとんど悲劇的な一種の初歩的雄弁にまで達して、聴衆はかたずをのんでそれを聞き入っていた。

それからさらにムヌ＝スグレ神父は、もっと重大な決意のうちに告解聴聞の仕事に彼に与えた。そうしたとき心を奪われて放心状態のことがあった。

「私は悪を知りませんでした。罪人たちの口を通じて、初めてそれを知るようになったのです。」<sup>19)</sup>

これはドニサン神父の後年の言葉であるが、クリスマスの夜の会話以降ドニサン神父が守り続けていた沈黙、従順、受身の柔和は、ムヌ＝スグレ神父にある種の警戒心を抱かせていた。

「あの男の行動は完全で、非の打ち所もない。また、その熱心さは燃えるようだし、効果的だ。すでに彼の司牧は成果をあげはじめている。では何を非難するのか？私以外の人間なら、どんなに多くの者たちがあのような男に授けられて老いてゆくことを幸福に思うだろう！見たところ、彼はまるで聖人のようだ。しかし、彼のうちのあるものが抵抗を感じさせ、私を警戒させる。あの男には歓びが欠けているのだ。」<sup>20)</sup>

## 02-3. 歓び

しかし、ドニサン神父は外面的にそれを現すことはなくとも歓びを知っていた。クリスマスの夜のムヌ＝スグレ神父との会話以来ずっと彼の心のうちにあった。

「確実に深く、一様で絶えることのない、謂わば揺るぎない歓び——この生命のうちなるもう一つの

生命、新しい生命の拡大にも似た別種の歓び<sup>21)</sup>

あの時、つまりクリスマスの夜、ムヌ＝スグレ神父が決意し、ドニサン神父もまた決意してかれの部屋を訪ねた夜、ムヌ＝スグレ神父から発せられた召しだしの言葉は、ドニサン神父の魂をうちそれはいつまでも彼の魂の奥深く響いていた。あの時、ドニサン神父は破滅していたのだ。召しだしを感じ、誓願をたて聖職への道に、イエス・キリストの道に殉じた筈の彼が、あの時点で感じていたのは、運命への不適合感であり、無力感であり、孤独感、そして絶望そのものであったのだろう。しかしムヌ＝スグレ神父は、彼ドニサン神父の中に聖寵のしるしをみたのだ。

「永遠に閉じ込められたと信じていた深淵の底から、いまや彼は、一挙にある手によって、疑惑も、絶望も、さらには過誤でさえ変容し栄光を与えられたかに思われるほどの高みに運ばれてしまったのだ。…この内的ヴィジョンは瞬時のものだったが、めくるめくようにまばゆかった。それが消えたとき、全ては再び闇に没するように思われた。しかし彼自身は同じ穏やかな光の中に生き、呼吸していた。そして、垣間見たあと再び消え去った表徴は、一つの確信の代わりに、一つの表現を絶した予感を残して行った。彼を拉し去った手はほとんど離れず、彼の手の届くところに待ち構え、もはや彼を見捨てないに違いない」<sup>22)</sup>

#### 02-4. 不安と闘い

しかしそのなかにあっても真の意味での歓びではなかった。あくまでも瞬時のものであり、それが永続することはなかった。魂はそれをしっかり捉えながらも、あるいは魂はそこに参与しているにも拘わらず、そのことを見つめる意識あるいは感情は完全には合一できない、そういう乖離が起こっていたのだろう。

「この歓びのさなかにあっても、恍惚が吸収しきれないあるものがまだ残っていた。」<sup>23)</sup>

その乖離は、その歓びが大きければ大きいほど激しければ激しいほど、そこから引き離される自己意識は、おびえ、疑惑となってたち現れ、そこに圧倒的な別の存在を認めざるをえなかった。

「この本能的な身振りにわれながら驚き、その意味を見極めようとした。一体何を探し求めていたのだろう？それまで漠然と不分明だった不安のかかる具象的な兆しは、現実的な眼に見える存在とほとんど同じくらい彼をおびえさせた。いまや彼は、その存在に対して、単なる感情以上のもの、表現できな

いが明瞭なある感覚を抱いていた。彼はもはや一人ではなかった。だが何者と一緒にいるのだろうか？」<sup>24)</sup>

その時彼ドニサン神父がなしたことは、魂のある（あるいはあるべき）ところ、すなわち歓びに目を向けることではなく、その歓びと彼とのあいだに忍び込んできた別の存在への憎悪と宣戦布告であった。その存在は見事に同じレベルに立ち、ドニサン神父と歩調をそろえるのだ。

「この決定的な瞬間に、彼は傲慢さからではなく、抗いがたい飛躍によって戦うことを受諾したのだ。敵が近づいてくるにつれて、彼は恐怖ではなく憎悪に駆られた。」「無言の諦念に満ちた悲しみ以外に安らぎを知らなかったこの渴いた魂は、かかる説明不可能な愉悦に対して驚き、そのあと恐怖をおぼえ、最後には苛立ってしまった。神秘的な登攀の第一歩でめまいに襲われたこの哀れな男は、勇気を失い、あらゆる力を振り絞って、この受動的な潜心、その見せかけの無為が彼の心を戸惑わせた内的静寂を打ち破ろうとした。神と彼との間に忍び込んだ例のもう一人は、何と巧妙に身を隠すことだろう！何と用心深く、狡猾に、慎重に、姿を現し、退き、そして再び姿を現すことだろう。彼とぴったりに歩調を合わせてしまっているのだ！」<sup>25)</sup>

それは精神を含めて肉体的存在である人間の避けがたいところであろうが、霊的な観点からすれば許しがたい存在なのだろう。それが人間という肉体的な存在が真の歓びから引き離される要因なのだろう。そしてそれはそういう存在である自己自身へと向けられるのだ。

「彼の思考は、まるで極度の肉体的苦痛に麻痺してしまっただかのように、もはやしっかりと定まらなくなっていたし、彼もまた、この許しがたい肉体のなかに潜む己の悪の根源自体に達し、それを破壊したいという以外になんの願望も抱かなくなっていた。…だが、その時誘惑は彼の心のなかにますます深く入り込み、彼はおのれの全てを憎むようになっていたのだ。」<sup>26)</sup>

そしてそうした怒り、憎悪は自分の肉体を打ち据える行為となって現れる。従順の徳そのものであったドニサン神父はムヌ＝スグレ神父の命令で、苦行衣の着用はやめていたが、今度はそれ以上の苦行を自分の身に強いたのだ。苦行鞭を使っていたのだ。霊的な存在に対する彼の戦いは、己自身に対しての盲目的な憎悪となり、気を失うまで自分を打ち続けた。

「いまや彼の想念は、かなたに、極めて穏やかな光の中に漂っていた！彼はその想念を、生涯のいかなる瞬間にもまして、静かで透明なものに感じていた。しかしそれは、説明こそできないものの、過去から切り離されたものだった。そして、もはや目覚め時の重苦しさでも、半ば朦朧とした意識の状態でもなかった。最後の帳も消え去り、彼は再び自己自身を見出し、明晰で積極的な意識をもって、だが、超人間的な解脱の境地でその自己を観察していた。」

「彼は存在している。彼は隠修士の祈りの中に、その断食と苦行の中に、このうえなく深い脱魂状態の空白のなかに、その心情の静寂のなかにいる。彼は聖水を毒し、祝別された蠟燭の中で燃え、処女たちの息のなかで呼吸し、苦行衣と鞭とともに人を引き裂き、いっさいの道を墮落させる。われわれは彼が真理の言葉を分かち与えようと開きかかった唇の上で虚言を吐き、至福の恍惚状態を貫く雷鳴と稲妻とのただなかで、神の腕の中にまで、正しき者を追求するのを見てきたのである。…悪魔の怨恨は聖人たちだけを獲物に定めたのである。」<sup>27)</sup>

その苦しみは肉体を持つ限り逃れることのできないものだろう。そのゆえに目は歓びの源である彼方の存在に向けられたまま肉体からの解放を願うようにもなるのだ。

「全ての歓びは悪魔からくる。これ以上私を欺かないでくれ。もう私を呼ばないでくれ！私を自分にふさわしい虚無に戻してくれ。私をあなたの死んだ素材にしてくれ。私は栄光を欲してはいない。私は歓びを欲してはいない。もはや希望さえも望んではいない。私に与えるべき何がある？私に何が残っていよう？この希望だけだ。それを私から取り去ってくれ！それを奪い取ってくれ！もしできるものなら、あなたを憎まずに、私の救いを放棄し、あなたがこの哀れな私の手に、まるで愚弄するように託したこれらの魂たちのために、自分を地獄におとしてしまいたい！」<sup>28)</sup>

こうして歓びにふれるという高みに至りながらも、そこから引き離そうとする存在の認識とそれへの戦いは、その後、エタープルの黙想会への途中での悪魔との遭遇、その直後のジェルメーヌとの出会い、そして魂の透視、それによるジェルメーヌの自殺未遂（肉体的自己破壊）と瀕死のジェルメーヌへの聖別へと続くドニサン神父の過激なまでの霊的エネルギーの迸りとなってしまう。それは肉体を持つ存在が真の聖寵のなかへ突き進む上での、避けがたい戦いであり、肉体的

なものへの嫌悪、憎悪、怒りとなって、この世での自己の抹殺さえ願うところまで至るのである。それはまた神への方向性とは逆の方向へ向かわせる力のベクトルが明確に作用している明らかなしるしでもある。

### 03. 結び

以上、この作品の重要人物であるジェルメーヌとドニサン神父について、そこに働く超自然のヴィジョンと悪魔の介入をみてきたが、作者ベルナノスがこの作品を発表するに際して持っていた作品の意図はどこにあるのだろうか。ベルナノスはルフェーブルとのインタヴューのなかで、次のように語っている。

「私が取りかかったのは休戦の数カ月のちでした。世相は荒れきっていました。恐ろしいほどでした。あらゆるところで見られるモラルの弛緩は耐え難い光景でした。…あのころペンをとった人なら誰でも、自分自身の言葉をもういちど征服し、鍛え直さなければならぬと感じておりました。」<sup>29)</sup>

ヨーロッパをどん底につき落とした第一次世界大戦が終わって、ヨーロッパがその狂喜のただなかあったとき、その退廃からの復興は、打ち棄てておかれた霊性の復興であり、秩序の復興であったのだ。大戦前のベル・エポックは大戦が終わると、何事もなかったようにまたぞろ復活していたのである。その狂喜乱舞のなかで、そこから何も学ばない同時代に向かって、一石を投じようとしたのである。

またこうも言っている。

「護教論はできるだけ悪の問題を避け、天使と悪魔をごまかしていました。天使と悪魔が生き続けるのは、ユゴー爺さんのアンチテーゼのなかだけなのです！ボードレールやランボーが待ち望まれていたのです。」<sup>30)</sup>

この『悪魔の陽の下』には、よく知られたように実在の聖人ヴィアンネーをモデルとしていて、『アルスの司祭』はベルナノスの愛読書であったが、単なる聖人論ではなく、彼自身のそして同時代に強く訴えかける聖人論を書きたかったのだ。

「わたしがどうしても必要としたのは、天の頂に目を向けるように、私の思考を一人の超人的な人間のうえに据えることでした。そのような人間の模範的で徹底的な犠牲的行為こそ、その意味が失われてしまったのではないかと私たちの恐れている聖なる言葉を、一つ一つ復元してくれるものなのです。私が私の聖人に求めたのは、美的感動ではありません



ん。教訓なのです。私が彼のなかに見ることを夢見たのは、聖寵によって昇華されていくもの、私たちの裏切られた愛、すでに憎悪が唸りをあげている危険な絶望だったのです。そしてそのうえこの教訓を、より不幸な同胞たちに伝え知らせたかった。」<sup>31)</sup>

この小説のなかでのドニサン神父の過激なまでの自己犠牲は、それについてふれられることはないのだがおそらくはジェルメーヌの魂の聖化にもあずかって力があつたと思われるのである。ドニサン神父はその後ランブルの聖者と呼ばれるようになり、教区を越えて集まってくる信徒たちの告解を聴き、救霊に生涯を捧げた功德であろう。それは救霊事業の保護聖人であるアルスの司祭ヴィアンネーの功德でもある。そしてそれはまた自身気づくことなく悪魔の陽の下に日々を過ごしているわれわれ自身の魂の救いにも、ドニサン神父の聖徳が大いに関係していると思われる。自己嫌悪、自己憎悪のなかに深く忍び込む彼方からの力に十分気をつけたいものである。とはいえ、前提としてそれだけの自己認識、自己探究、自己追求が必要条件かもしれないが。この時代に生きる我々の生活をいまいちど霊性という観点からみる必要があるかもしれない。

#### 註

Texte: Georges Bernanos: *Sous le Soleil de Satan* (Bernanos: Œuvres romanesques. Bibl. de la Pléiade, 1980)

訳については山崎庸一郎訳（春秋社版）を使用。

1) *ibid.* pp. 1772-1773

2) この小説は、1919年に書き始められ6年の歳月をかけて出版の1年前の25年の5月にはほぼでき上がっていたことが、ヴァレリー＝ラドーの証言で知られている。書かれた順序は、「ランブルの聖者」「ムーシェットの物語」「絶望の誘惑」の順に書かれた。この小論では、ジェルメーヌとドニ

サン神父の関わりを中心に考察したので、小説全体の前半部を主に考察することになった。

3) 序にあたる「ムーシェットの物語」からそれに続く第一部「絶望の誘惑」に至る小説の構成は、時間、場所、実現の形象の世界と精神的超自然の世界が相互に浸透し合う濃淡が素晴らしく、興味深い。

4) *ibid.* p. 83

5) *ibid.* p. 90

6) *ibid.* pp. 91-92

7) *ibid.* p. 95

8) *ibid.* p. 98

9) *ibid.* p. 114

10) *ibid.* p. 114

11) *ibid.* p. 117

12) *ibid.* pp. 119-120

13) *ibid.* p. 120

14) *ibid.* p. 126

15) *ibid.* pp. 131-132

16) *ibid.* p. 133

17) *ibid.* pp. 133-134

18) *ibid.* pp. 137-138

19) *ibid.* p. 140

20) *ibid.* p. 141

21) *ibid.* p. 141

22) *ibid.* p. 146

23) *ibid.* p. 146

24) *ibid.* p. 146

25) *ibid.* p. 147

26) *ibid.* p. 149

27) *ibid.* pp. 153-154

28) *ibid.* pp. 154-155

29) Bernanos: *Essais et écrits de combat I* (Bibl. de la Pléiade, 1971.) p. 1039 (Interview de 1926 par Frédéric Lefèvre)

30) *ibid.* p. 1041

31) *ibid.* p. 1043